選ばれた戦舞姫

雪野おと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

選ばれた戦舞姫

【Nコード】

N5566S

【作者名】

雪野おと

【あらすじ】

選ばれた者しか触れられないとされる王家に伝わる美しき宝石。そんな貴石に触れたのは、当時三歳の少女だった。選ばれてしまった彼女には、過酷な運命が待ち受ける事となる。異世界恋愛ファンタジー、以前他サイトにて掲載していたものを世界観を変えて連載開始しました。

それは素敵な素敵な憧れの宝石

綺麗な輝く大きな宝玉に、散りばめられた色とりどりの宝石が美しい王家に伝わる不思議な石。

触れる事ができるのは、選ばれた救世主のみと噂される美しい魔力^{ほうせき}

触れてしまった可哀想な少女は、まだその時たった三歳だったという

「お嬢様。お嬢様！ ルーチェ様！ 起きてくださいませ！」

「うーん、もうちょっと……」

「もうちょっとって、もう朝の八時でございますわ！ 今日旦那様が朝食を一緒にと、起きてくださいませ！！」

揺り起こされた私は、まだ寝ぼけ眼で言われた言葉を反芻した。

旦那様が……朝食を……

「え！ お父様がお帰りなの！？」

「ですから、そう先ほどから申しておりますのに！」

「やだ！ 早く起こしてくださいですよー！」

慌てて私はふかふかのベッドから飛び降り、夜着から薄手のワンピースに着替える。

首にはアイオライトのネックレス、耳には両耳合わせて三つのピアスに、腕には沢山のブレスレット。

とりわけ左手首からブレスレットでつながれ、の甲を覆うように

指輪で止められている大きな宝玉は何色とも表現できない不思議な色合いで、私の身体は宝石だらけ。

といっても、左手の甲の石以外は結構小さくて素朴なものもおおいのだけだ。

手の甲を隠すように袖の長いワンピースで宝石を隠して、私は薄い桃色の癖のある髪を侍女に梳かしてもらいながら手首の宝石をひとつひとつ確かめる。

よし、今日もばっちり。

「ありがとうございます！ お父様のところに行つて来るです！」

「お嬢様、廊下は走らないで下さいませっ」

慌てる侍女のシエルにはあいと片手を挙げて、私は急いで食堂へ。食堂の扉を開けると……

「お父様！ お帰りなさい！ いつ戻られたんです？」

「おお、ルーチェ。朝から元気だな。今朝戻つたんだよ」

大きな身体を揺らして、お父様が私に笑みを返してくれる。

お父様は、この国イオンテリアの軍隊の大將。いつも仕事で家にいなくて、会える日はめずらしい。

しかも最近ではこの世界に三つある国のうち、一番密接している国であるランデリアと冷戦が続いていて、油断できない状態。

会うのは、数週間ぶりだ。

最近会つた事や、お父様の仕事のお話を聞きながら和やかに進む朝食。

お父様はとても優しい。お母様は私が生まれた後すぐに亡くなつてしまつたみたいだけど、とても愛情を注いでくれる。

そして食事を終えた私達の間、突如ぴりりとした空気が走つた。

「ルーチェ・アイオライト特務師団長」

「はい！ アイオライトイオンテリア軍副団長！」

仕事モードのお父様に、私はぴつと姿勢を正す。

私はこのイオンテリア国の、特務師団長ルーチェ・アイオライト大佐。本当はもっと上の階級を、といわれているけれど、私はまだ

十七歳なのだ。

お父様はイオンテリア軍の、副団長で階級は大将。とても忙しく家に帰れないのは、しょうがない。

「レイン・クンツァイト少将の所へ向かい、例の薬を受け取るように。陛下がお前に頼みたい事があるそうだ」

「……任務、ですね、わかりましたです、お父様」

ぐっと手を握るのを見て、お父様は私が仕事の話で「お父様」と呼んでも咎めず顔を歪めた。

「きつと無事に戻ると信じているぞ、ルーチエ。無理はするでない」

「もちろん、お父様。ルウには、いつでもイオンテリアの神のお力がついております」

それは……この左手の甲の石が証明してくれていて、そして受け入れなければならぬ……運命だ。

朝食を終えた私はお父様に挨拶をして、軍服に着替える。ひらひらのスカートが可愛い、私特別の軍服。なんたって、特務師団は私しかない陛下付きの特別な師団だ。

その行動は他の師団には伝えられていない大切な軍務が多く、なぜそれが十七歳の私が行うかといえば……偏にこの左手の石が原因だ。

この国の神の力が宿っているとされる宝玉、イオンテリア石。この石に選ばれた私は、数々の訓練を積んで軍へと入った。

この国を、守る為に……陛下を、守る為に。

「レイお兄様！」

「やあ、ルウ、待ってたよ」

私の事をルウ、と愛称で呼ぶレイお兄様は、レイン・クンツアイト少将と言つて私のお兄ちゃんみたいな人。とっても優しく、仕事もすごくできるかつこいいお兄ちゃんなんだ。

さらさらの少し長め黒髪に、赤と青のオツドアイ。何かの研究でもととの青い瞳が、右目だけ赤くなつたんだって聞いた。

小さな頃から面倒見てもらつていて、大好きなお兄様。二十六才だから……私と九つも離れてるのに、その年で少将つていう凄い人。すごく魔術が強いんだ。

それに、特殊な体質になつてしまった私の身体を守る薬を唯一作つてくれる人。頭もめちゃうくちやいいんだよね。

「お兄様、お薬貰いに来たの」

「うん、できているよ。でも、絶対飲み過ぎない事。わかつてるね？ 一人で飲むときは無理矢理宝玉の魔力を取り出す事になるんだから」

「わかつてるです、お兄様。つていつても、一人で飲む予定しか今のところないんだけど……」

むう、と頬を膨らます。

「わかつてるよ？ 早く彼氏できたらいいね？」

「む、お兄様つてばひどいです！」

優しく笑つお兄様に、本気で怒る私。

だつて私が憧れている人は……絶対、叶わない相手なんだよ。

「ほら、薬持つて、早く陛下の所に行つておいで。旅に出るなら先にここに寄るんだよ？」

ふわり、とお兄様の大きな手が私の頭を撫でる。頭を撫でられるのは好き。とっても気持ちいい。

「わかつたです、行つてきます！」

陛下、と聞いて私は嬉しくて満面の笑みをお兄様に返してお兄様の執務室を後にする。

陛下、今日は何してるのかな。頭撫でてくれるかな？

その時どんな任務を言い渡されるかも知らずに、私はうきうきと
皇帝陛下の私室へと足を向けていた。

「よく来たな、ルウ！」

にっこりと微笑んで私に手を上げてくれるのは、この国の皇帝陛下。まだ若くて三十歳。背が高く、かっこよくて、赤い髪がよく映えている。

その青い瞳に覗き込まれれば私の目だって同じ色なのに心臓は激しく高鳴る。肌の色が白くて綺麗で、でも筋肉は凄くて、抱きしめられたときその硬い胸板にすぐどこどきする。

「今日もちみっこくて可愛いなあ！ ほら、こっちに来い」

「陛下ってば、ルウを子供扱いしないでくださいです！」

む、と怒りつつも身体は招く手につられるようにふらふらと陛下の傍へ。

陛下の私室には、今陛下と私の二人きり。普段は護衛が付いているんだけど、私に来る時は外に出される。

陛下は私を信頼してくれている。能力も、そして存在も。

「陛下、任務って聞いてきました」

「……そう、だな」

歯切れ悪く陛下は頷いた。心なしか……というか思いつきり顔色が悪くて、どうやらいい任務ではないらしい。

「陛下？」

「実はな……貴族院の連中が煩くてな。特務に隣国に乗り込ませて探りを入れると言ってきているんだ」

「……つまり、ルウ一人でランデリア王国に乗り込んで内情を探つて来いって事？」

「悪い。あいつら、特務の人間がまさか女で、まだ十代だなんてもちろん知らねえし、宝玉に選ばれた奴だったのも知らないから……駄目だといっても煩いんだ。力ない皇帝で、本当に悪い」

隣国ランデリアとはもうすぐ戦争が起きるだろうと囁かれている。

つまり、向こうがどこまで準備をしているのか私に乗り込んで調べて来いといっているのだ。

バレたらもちろん私は命が危ない。それどころか、人質としての価値があるかはわからないが、この国に迷惑をかけるかもしれない。それでも。

「私の仕事だよ？ 大丈夫。私にはイオンテリアの神様が付いてますです。きっと無事に調べ上げて戻ってきますよ？」

「……そう、言うと思ってたんだ。悪いな、ルウ。絶対に、絶対に無事に戻って来いよ」

特務は陛下付きの隠密師団。しかも、私一人だ。私は表向きレイお兄様……レイン少将の部下でアイオライト大将の娘、能力が高いという事で単独行動が多い、少佐の扱いを受けている。少佐でもこんな若い奴が、とやっかみを受けているのに、まさか特務師団の大佐だとは誰も思っていないだろう、一部の人間以外は。

陛下は何度も無事に戻って来いといって頭を撫で、目を覗き込んでくる。

私は笑顔を返す。どんな危険な任務も、陛下の為なら私はやる。例え私の身体が普通と違って。

「そうと決まれば、レイお兄様のところによって旅の準備をしますです。陛下、必ず戻りますから、待っていてくださいいな？」

「ああ、わかった。怪我はするな……それと、薬も飲みすぎるな。わかったな？」

「もちろんです！ では、行って参ります！」
につこり笑って頭を下げ、部屋を出る。

大丈夫、私は頑張れる……

「レイお兄様！」

「やっぱり、旅？ 今度はどこに？」

再び姿を見せた私を見て、執務机に座っていたレイ兄様は心配そうに私に近寄って引き寄せ、頭を撫でてくれる。

「隣国ランデリアに。どこまで戦の準備ができているか調べて来いって」

「……っ、そんな危険な任務をまさか陛下が行けと？ ああ、どうせ貴族院が騒いだんでしよう。ルウ、あなたの身体は……」

「大丈夫！ 薬も使いすぎないし、本当に頑張れるから。それに複数じゃ動けない任務だし、私ならばっちりだよ」

まだ何か言いたそうに形のいい唇を動かしていたお兄様は、諦めたようにため息をついた後部屋の奥へ歩いていく。

片手に乗る小さな袋を取って、私にそっと渡してくれた。

「二十粒程入っています。一月半は持つでしょう……けれど、無理をすればそれも足りない。今日渡した分を合わせても、期限は一月半から二ヶ月と想着。いい？ 魔力を使わない前提の話です」

「わかった。でも二ヶ月か……厳しいな。言って、王都に入るのに多分半月はかかるだろうし……急がないと」

「二ヶ月あると思わないで。なるべく、早く。私もいけたらいいのですが」

「心配しないで、必ず無事に戻るから。お兄様が隣国に行ったら、すぐにバレちゃうよ。戦場の嵐レイン・クンツァイト少将を知らない軍人なんて向こうにいないだろうし」

「くれぐれも、あなたこそ顔を知られないように。フードを被っついてきなさい。いいですね、顔を出しては駄目」

「お兄様、必ず、無事に戻ります。だから、そんな悲しそうな顔、しないで？」

そっと背の高いお兄様の眉間に、手を伸ばして指で摩る。

「ルベライトはどうします？」

「連れて行くです！ こんな長期間離れるなんて嫌だもん。家に戻ってルベライトと合流したら、すぐに発つです。行ってきます、お兄様！」

ぱつと手を上げて、元気に振る。最後まで心配そうにしていたお兄様に笑顔で行ってきますを告げて、私は愛猫ルベライトを迎えに屋敷へ戻り、旅の準備をして。

「にゃあん」

「ルベライト、長旅になるよ。力貸してね？」

真っ黒のつやつやの毛にぴったりの赤い首輪と赤い石を揺らして、ルベラはにゃんと返事を返してくれた。

「よし、出発！」

私は暗くなってきた街を一度だけ振り返って、帝都を飛び出した。

深く飲み込まれるような夜の闇色に
輝く花びらが舞い落ちる。

ひらひら　ひらひら　舞い散る花は

精一杯の、生を現す

「……つやあ！」

帝都を飛び出して四日、夜の闇の中。

私は現れた魔物相手に、槍をつき立てた。

立ち込める血臭は、すぐに花の香りに変わる。そして、飛び散る
血飛沫はふわりと舞い散る花となる。

これがアイオライト家に伝わる槍術の、魔力。
敵を惑わし優雅に舞う、妖しの魔力は見るものの視線を捉えて放
さない。

襲い来る魔物の攻撃をひらりとかわし、槍を地面に突き立ててそ
れを軸に身体を浮かせ、魔物を蹴り飛ばし、新たに現れた魔物は引
き抜いた槍で切りつけて。

ふわふわ舞う花びらの中、私は踊る。戦の舞を。

「ガールルルっ」

「ルベラ！ そっち行った！」

その一言で闇に溶け込んでいた何か、赤いリボンをひらりと揺

らして魔物の頭に着地した。

突如、魔物の身体に雷撃が走る。

「にゃあ」

「ルベラ、お疲れ様……あと一匹、やああ！」

槍をで思い切り頭を叩き付け、どすんと音を立てて魔物は草原に倒れた。

熊。ワーベアと呼ばれる、人肉を好む魔物だ。

もう一つの隣国であるグランテリア王国でよく見られる魔物。

昼間、上手く身分を偽りグランテリアに入る事ができた。イオンテリアから直接ランテリアの国境を越えるのは容易ではない為、間に他国を挟むことにしたのだ。

すました様子で敵の頭からひらりと身を翻し、愛猫ルベライトは私の方に歩み寄るとにい、と声を上げた。

「さつすがルベラ。お手柄なのです」

抱き上げて、微笑めばぺろりと舐められて、笑う。その時……

「いやあ、見事だった。どこの術者かと思えば、こんなに可愛らしい少女だったとは。いや、なかなかいい物を見せてもらった」

突如、偉そうな男の声が聞こえて、私は思わず槍を構える。

「これは噂に名高い隣国のアイオライト流創術ではないか、お主、アイオライト大将の師事を仰ぐ者か？」

「……、恐れながらひと時」

「噂以上の術。たいしたものだ」

アイオライト槍術を使いこなせる者は少ない。

敵を惑わし浄化して、切られた者はその罪すら清められるというこの術は、花びらの中舞うように戦い数々の魔力を使う。

花びら舞い散る中踊る事はできても、魔力を行使する程の能力者は私が知るところ自身を含めて三人しか知らない。ばれていないだろうか、とひやりとした。

それにしても、いつからこの男は見ていたのか。木を避け姿を現

した彼は、月明かりにぼんやりと浮かび上がりその表情に挑戦的な笑みを浮かべていた。

燃える様な赤い髪が夜風に揺れ、身体を覆う布がはためいた時ちらりと下に鎧が見えた。グランテリアの騎士だろうか。

「それで、何故まだ齢十五もいかぬような女が一人でこんな所にいる？　ここは見ての通り魔物の巣窟だ。もつとも、お主の敵ではないようだったが」

偉そうに言葉を続ける彼だって、たぶん年はそんな変わらないだろう、まだ私と同じ十七、八くらいで……ってちよつと待て！

「なっ、わ、私十七です。もう大人ですっ」

私の国は十六で女子は成人とされる。グランテリアは……どうだっただけ。

「十七……俺と同じ？　まさか。嘘を言うな」

「嘘言いませんですっ」

なんだこの失礼な人！

それに、やつぱり同い年じゃないかっ

「にしても成人した女であろうと何故ここに？」

あ、よかったグランテリアももう十七は成人らしい。しかし困った。何故ここにと言われれば、敵国に調査に行く為なのだ。

「私は旅の歌い手にございます」

「歌い手？　狩人の間違いではないのか」

……失礼な奴だ。もうここ、離れたいんだけどいいかな。

確かに目の前で魔物倒しまくったけど！　狩人なんてごつい男の人ばかりの職業なのに乙女を捕まえてなんてこというのだろうこの人はっ

「歌って見せよ」

「……っ」

思わず、「ヤダ」といいそうになったのを必死で堪えて言葉を飲み込む。

じっと思わず相手を見つめてしまいが、相手は未だその口元を挑

戦的に持ち上げて笑っているだけだ。

「どうした？」

「っ、それ、では……」

歌い手と言ってしまった手前ここで歌えませんが通用しないだろう。見たところ騎士か何かのようだから、下手はできない。

一つ大きく息を吸い込む。

昔から練習していた舞を踊る時、自然に覚えてしまった歌。

好んでよく歌い、そのうち歌は陛下も褒めてくださる程上手くなつたと思う。

「桜の花が舞い落ちる……」

儂いものを憂う、この世界で知らない者がいないであろう歌を夜風に乗せて響かせる。

歌うのは気持ちがいい。口が自然に開いて、声が風に溶ける。

「ほう……なかなか」

確かに彼がそう呟いたのが聞こえて、私はゆっくりと頭を下げた。「その技量歌い手にはもったいないと思ったが、なかなかの歌であった。旅はこの国の王都を目指しておるのか」

「……いえ、今は隣国ランデリアへ向かおうと思っっているところです」

「ここは、分かれ道。この国の王都へ向かう道と、隣国へ向かう道に分かれている通りの付近だ。」

「そうか……残念だな。また機会があればこちらにも顔を見せるがよいぞ。お主、名は」

「……サクラと」

思わず使う偽名。しかも、桜の歌を歌った後のばればれの嘘。しかし彼は含みある笑みを浮かべたまま、頷いた。

「俺はジルだ。覚えておけ。ちなみに、本名だ」

「……………」

息を飲んでいる間に、さっそうと赤毛を揺らして彼は立ち去った。
…………… やっぱり偽名ばれてたか。

にしてもなんて偉そうな人なんだっ！

「はぁ……………」

私はそんな事を考えながらも胸を押さえて。

『薬飲むにゃ』

「ごめ…………… ルベラ、ありが、と」

お兄様に渡された布袋から、薄い水色の飴玉をころりと手の平に
転がして、それを口に含む。

口の中に広がる甘さと…………… じわじわと身体に戻る魔力。

魔力を垂れ流し続けて消耗する私の特異体質を救ってくれる、大
切な薬……………

「さぁ、止まってる暇、ないです。行こう、ルベラ」

ランデリア王国王都にたどり着いたのは、祖国の帝都を出てから十日はたった頃だった。

「帰りもそれくらいかかるとすれば、薬はぎりぎり。かなりまずい。帰りはスピードアップして帰らないと」

『にや。それで無理して薬の量増えても、駄目じゃないにや?』
「そんな事言われたって、早く帰らねばならないのだ。」

「せめてイオンテリアに入れればお兄様が何とかしてくれるです…
…つとと、会話、気をつけないとね」

もうここはランデリア王都。イオンテリアに帰るなんて話題はまずいし、何よりルベラの言葉は今私しか聞き取れないだろう。

ルベラは話したい相手に言葉を伝える事ができる不思議な猫だ。もともと、ルベライトの首についている魔力石のおかげなのだけだ。

お父様はいつも家にいらっしやらない方だから、よく一人ぼっちになっていた私の大切な友人……友……猫?

王都に入ってから私は身体を足元まですっぽりと隠してしまうマントに身を包んで、頭もフードを被って隠している。顔もなるべく見えないように深めにフードを被り、口元は布で覆い隠している。

旅の人間ならよくある格好だから、特に怪しまれる事はないが、私がここまでするのはレイお兄様の指示。

なんでも女の子が顔を出して歩くといけない国だから……とか言われたのだが。

「…みんな顔出して歩いてるじゃない」
『顔どころか、露出高い国だにやあ』

お兄様の嘘付き。みんな可愛らしい装飾品やら赤い布に金の刺繍が施された胸を覆おう布とスリットの大きく入ったスカートを身に

つけたりして、とつても美人さんが多い。

それに比べて私ときたら。全身ベージュじゃん。

『まあ、きつと心配したんだにゃあ』

「どこがなのですっ暑くてしょうがないですよ」

布の下でちよつと頬を膨らませて街中を歩く。街中は賑わっていて、所狭しと並ぶ店にはきらきらした衣装やぴかぴかの宝石と、心引かれるものが多く並んでいる。

ああ、宝石屋さん寄りたいな、いい魔力石あるかもしれないし。

……そう、私の魔術は、魔力石の力を利用する神の宿る石イオンテリア宝玉に選ばれし者のみに使える特殊な魔術。

魔力石に宿る能力をそのまま自分の魔術として使用でき、たとえば翡翠ジェイドを使えば風を身に纏い軽やかな動きをすることができる。

使う石はイオンテリア宝玉が生み出した飾突槍と呼ばれる槍に装着するもしくは身につける事によって使用する事ができ、槍自体は普段宝玉の中に収められている為今は手ぶら状態。まあ、体術もそれなりにできる……とは思うけど。

と、言う事で、暑いしアクアマリンが欲しい。冷却したい、冷却。『無駄に魔力使うと、レインに怒られるにゃ』
……はい、わかってます。

さて、私のそもそもの目的は、観光ではなくて敵国調査。

もちろん我が国に攻め入ろうとする動きがあるかどうかかなんだけど……

どうしたものか。まさか軍の重要なところには行けそうにないだろうし……

ふむ、と考えて私は果物屋から一つ、赤い実を買って日陰に入り頬張る。リンの実と言って、甘酸っぱくて美味しい、柔らかい果肉の果物だ。少し取り分けてルベラも冷やしてあった冷たい果実を頬

張り、口元をぺろりと舐めている。

とりあえず軍本部の近辺まで近寄ってみるか……イオンテリア国との国境を見れる高台に上るのもいいかもしれない。あと重要なのは、人々の噂だ。

私は果物を食べ終えると、とりあえず歩きながら人々の会話に耳を傾ける。

流行のファッションの話題やら、どこぞの店のお茶がおいしいやら。平和そのものの会話。

しかし……

少し治安の悪そうな通り入り口付近になれば、じろりと睨みあげてくる男の傍での立ち話は興味深いもの。

「なんでも、誰でもいいから兵を募集する、らしいぜ？」

「どうせイオンテリアに攻め込む為の捨て駒にする気だろ？ 俺らを」

「お国のお偉いさんにとつちや俺らゴロツキ野郎共も一掃できて一石二鳥ってか？」

「でも金額が破格だぜ、なんたって戦に参加する奴にはそれまでの衣食住、プラス帰還後十萬バルタ払うってんだから」

「マジかよ、一年は飲んで暮らせるな」

ふむ。十萬バルタなんて、確かに破格。普通の人が一月で稼ぐのが五千バルタくらいなのだ。

つまり……その集める兵っていうのは、捨て駒だ。確実に。そして、戦まで衣食住の提供という事は……

「で、それいつからいつまで募集なわけ？」

「再来月から一ヶ月募集するってよ」

ってことは、三ヶ月後以降は危険だ。衣食住の提供にかかるお金を、いつまでも国が負担するわけないだろう。

よし、後は高台にでも上って国境付近の様子でも見て……

「あつれえー？ 君、女の子が一人でこんなとこ歩いてちゃいけないよ？」

急に俯いていて視界に入っていた地面に影ができて、私ははっと顔を上げた。

「うっわ、超可愛いじゃんマジで！ やっりい、上玉発見」

目の前には、二人の男。にやにやと君の悪い笑みを浮かべていて、こちらを見下ろしている。

しまった…… 果実食べた後、口元を布で隠すのを忘れていたんだ！

「ねえ、ちよつとお兄さん達とイイ事しようよ」

「はっ！ イイ事ってお前。まあ、イイよなあ？」

にやにやにや。気持ち悪い笑み。声を聞いているだけで、ざわざわと胸が絞まる感じがする。

「通してくださいです」

「うわ、声も超可愛いー」

「何歳？ 十三くらい？ 犯罪じゃねー？」

「ばっかお前、何言ってるんだよ」

ぎやはは、と笑う二人。……今なんていった？ 私の事、十三歳って言った？

「通して」

肩の上では、ルベラがひやりと冷たいオーラを放っている。

ルベラに攻撃させるのは、まずい。ここはまだ大通りに近いのだ。なら、大声を上げるか…… いや、誰もこんな場所に立ち寄りたくはないだろう。

なら…… 私が対処するしかない、か。正直男の人相手は…… 苦手、なんだけれど。

その時、私の腕を右側に立っていた男が掴んだ。右腕に、激痛。

なんて強い力で掴むのだろう。それと同時に、ぞわりと鳥肌が立つ。

ルベラが牙をむき出して威嚇した。が、男はけらけらと笑う。

「……放してほしいです」

「放す？ んなわけないじゃん」

ぷつ、と何かが切れた音がした。

さつと痛む右腕を、強く引く。思わぬ力に男がバランスを崩す。

ルベラは私の動きに合わせて男の腕に飛び乗った。いけない、ルベラに攻撃させたら騒ぎになる！

「ルベラ！」

「おっと、あんたらこんなところで何やってんの」

目の前の二人とは別の、透き通った声が辺りに響いた。

ルベラが私の声に反応して、ぴよんと私の肩に戻る。

男達は新たに現れた存在に注目していて、ルベラは一安心したのかごろごろと喉を鳴らして頭を私の頬に擦り付けた。

「お嬢さん、早く逃げなさい」

その言葉でその透き通った声の主に目をやると、そこにいたのは……騎士鎧を着た男だった。

剣をいつでも鞘から抜ける位置に手をやり、すつとゴロツキ二人を睨むのは綺麗な緑色。そして、日に透ける金の髪は短く切りそろえられていて、風に揺れて絹糸が光っているようだ。

何て、綺麗な人。どこか……気になる。

「お、俺らは何もしてないぜ。ただこいつが迷子みたいだったから……」

「なら、さっさと立ち去るがいい。この剣が抜ける前に」

「お、おいずらかるぞ」

思いつきり悪人の台詞を吐いて走り去る男達。

「……ありがとうございます」

まさか敵国の騎士に助けて貰うことになるとは。私、これでもイオンテリア軍特務師団長なだけだな。もちろん、名乗れるはずはないけれど。

「……危ない、所だったね。君みたいな可愛い子がこんな所を歩いてたらいけないよ」

「子って、私……はあ、私、十七です。ちょっと、道に迷っちゃって」

いい加減慣れてきたぞ、幼女扱い！ もう。皆して失礼だ。

「……ああ、二つ、違いだ。僕は十九なんだ。よかった」

何がよかったのかよくわからないが、男はにこりと笑って手を出してきた。

よくわからず、握手を交わす。

……あ……わかった。陛下に少し似てるんだ、見た目。

ぼーっと見上げてその容姿をまじまじと見つめると、緑の瞳が揺らいで、彼は少し顔を背けた。

「こんな可愛い子に、見つめられるとちょっと照れるんだけど……」

「え！ うあ、あ、す、すみません！」

わ、私ってば！ か、可愛いはお世辞として、ちょっと見つめすぎた。何やってるんだ私はっ

「いえ、ちょっと恥ずかしいですけど……嬉しいですね」

金色の短い髪を揺らして、にこりと微笑む王子様のような目の前の騎士は、さて、と私を大通りへ促した。

「道に迷っているのなら、ご案内しますよ。どこへ行くつもりでした？」

「……私は、旅のものです。歌い手、で。どこか、歌を歌えたら」

「歌を……歌うのですか。ぜひ、聞きたいです。あ、お名前は」

私は少しの間、迷った。相手は、敵だ。

そして私は普段少佐の地位で、いつもお兄様の後ろにいるような存在だから名を知られてはいないだろうけれど。……

「ルー……シエ、です」

私は『ルーチェ』ではなく『ルーシエ』と咄嗟に名乗った。

彼はふっと笑うと「ではルーシエ」と私の手を、そっと引く。

「僕は、コーラルといいます。さあ、いい場所があります。そちらに向かいますよう」

連れて行かれたのは、開けた広場だった。

少し離れた先には噴水。あちこちのベンチには、カップルや小さい子連れの家族。公園、だろうか。

緑が多くて、街中とは打って変わって、空気が気持ちいい。

「ここで歌ったら気持ちいいと思いませんか？」

「本当です……！　すごい綺麗な場所」

空気も綺麗、清々しくて、こんな青空の中歌えたら素敵。

「歌ってもらえませんか？　あなたの歌声を聴いてみたい」
まるで、王子様みたいな言葉。

「いいんですか？　ここで歌って」

「ええ、ここなら、大丈夫ですよ」

そういつて彼は一步離れた。

私はきよろりと周囲を見渡して、少し深呼吸をして。

ぱさりとフードを下ろし、桃色の髪が風に揺れ、左頭部の髪飾りがちやり、と音を立てた。

誰かが、息を飲む声が聞こえているはずなのに、私の耳には届かない。

歌うのは……　大好き……　そのまま踊りだしたい位に。

「　叶えたい愛は……　手の届かないところに……」

私は歌う。大好きな歌を。心を込めて、想いを込めて。

広い公園に、私の声が響き渡る。私はゆっくりと手を動かした。
舞うように、気持ち伝わるように。

ふわりと私の羽織っている布が風に舞う。たん、と軽くステップを踏めば、それは歌の伴奏のように周囲にリズムを生み出して。

ぱち、ぱちぱちぱち……

急に聞こえた音に、私ははっと前を見た。コーラルさんをはじめ、公園にいる人たちがいつの間にか私の傍に集まって、拍手をしてくれた。

降りていたルベラの前に、沢山の硬貨。

「よ！ 可愛いねお姉ちゃん、最高だったよ！」

「おねーちゃん、綺麗だった！ お歌、素敵！」

小さな子まで、拍手してくれていて。私は、歌に入り込みすぎていて回りに気づいていなかったから、今更頼に熱が上る。

「あ、えつと……ありがとうございます！」

慌てて頭を下げる。すると、コーラルさんが近寄ってすごいよ、と褒めてくれた。

「とても綺麗な歌声に、舞だった。すごく素敵だったよ」

「ありがとうございます、コーラルさん」

「ラル、でいいよ。そっちの方が呼びやすい」

「……じゃあ、私もルウで。呼ばれなれないんです、ルーシェって」「親しい人はルウって呼んでるのかな？ じゃあ、喜んでそう呼ばせて貰おう」

彼の笑顔は……陛下に、本当に似ていて……思わず、私も微笑みを返した。

「本当にここでいいの？」

「コーラル……ラルが、そう確認してきた。」

ここはランデリアの王都の出口。私はここから国境の見える丘を指すつもりだ。

昨日は公園で歌った後、宿に一泊して……朝、外に出るとそこにはラルの姿があった。

今日、発つて昨日言ってたから、と笑う彼は、私は随分早朝に宿を出たのにいつ起きたのやら。

送っていくよ、と町の出口まで送ってくれた彼。

「大丈夫なのです。私、結構強いのですよ。それに、旅をしなくちゃ。私は、ずっとこの街にはいないのです」

「にゃあん」

ルベラが肩で、可愛らしい声を上げる。

「……この後は、どこへ？」

「イオンテリアか……グランテリアか……まだ決めていないのです」「なら、イオンテリアは避けたほうがいい。あそこの国境は、今ごろたついているから」

「え？」

いきなりの、私が飛びつかざるをえない話題に私は素っ頓狂な声を上げてラルを見上げた。

慎重に考えを巡らせる。何て言えばいい？ このまま、ラルから情報を引き出す？

いい人、だけど……

相手は、敵、だけど……

どうしたらいいのかと、ごくりと私は生唾を飲み込んだ。

その時、彼が一瞬迷ったように視線を泳がせて。

「今、隣国イオンテリアとこの国はあまりいい状況ではないんだ。国境付近は、小競り合いも多い」

「……まさか、戦争になっちゃうですか？」

脳裏に過ぎつたのは、大切な陛下の顔。

私は後ろめたさに、少し奥歯を噛んだ。

私は、彼の敵。イオンテリア軍特務師団団長、ルーチェ・アイオライト大佐！

「そうだね、近いうちに……開戦になると思うよ。国境付近は近づかないで。君みたいな可愛い子、昨日みたいに飢えた男の餌食になるだけだ」

「……わかりましたです。ありがとうございます、ラル」

私は、頷いて……笑って見せた。
どんなに酷かるうが、構わない。私の命と生は……陛下の為に。

国境に寄る必要は、なくなった。

情報なら手に入れた。開戦するのは間違いない。

それなら一国も早くこの情報をイオンテリアに持ち帰るのみ。

私は来た道と同じように、グランテリアの道へと戻り馬車で、グランテリアへと入国する。

「ラル……ごめんなさい、です」

せっかく仲良くなれたけど、私はあなたの……敵なの。

グランテリアの道を踏みしめる。

私は……空を仰いだ。

あの公園と同じ、澄んだ青い空を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5566s/>

選ばれた戦舞姫

2011年4月22日00時40分発行